

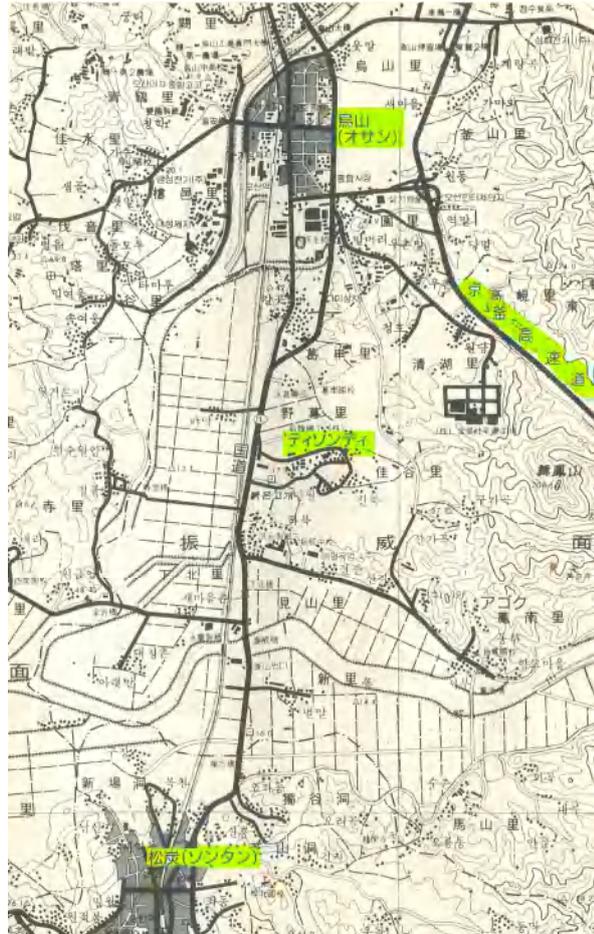
村の祖先祭祀

——ロジャー・ジャネリと任敦姫の『祖先祭祀と韓国社会』再考——

ロジャー・ジャネリ、任敦姫（イム・ドンヒ）夫妻が、ティソンディをはじめて訪れたのは一九七三年九月のことである。ティソンディは、ソウルから南に約五〇キロだった小さな農村で、上の部落（ウン・マウル）、中の部落（チュンカン・マウル）、下の部落（アレソ・マウル）の三つに分かれて、三〇〇名ほどの人たちが暮らしていた。この村に住む権氏一族は、慶尚北道の安東に本貫をおき権幸を始祖とあおいでいる。けっして特別に豊かな村ではないが、かつて優れた武人や高官を輩出した一族の末裔として両班の誇りを持ち続けてきた。現在では、権氏以外の人々も多く住んでいるが、最初に権氏以外の人々が定住したのが一九三〇年のことであるというから、典型的な「両班同族村」であったといってよい。

二人はこの小さな村に住み、村人と生活をともにしながら、暮らしの中に生き続けている「祖先」というもう一つの目に見えない実在と村人との交流を丹念に記録した。韓国農村社会の民俗学あるいは人類学の研究は、量的にも質的にも実に豊かである。しかし、このようにしっかりとフィールドに根をおろしたモノグラフィーは、意外なほど少ない。一冊の記録としては、これまで金宅圭の『韓国同族村落の研究』（一九六四）があるのみではないかと思う。

金宅圭の『韓国同族村落の研究』は、韓国の両班文化の故郷とも考えられる河回マウルにすむ河回柳氏の、格調高く美しい様式を備えた生活を記録した見事な著作だが、韓国農村のごく普通の姿を知りたいという読者には、多少の不満を残した。これに対して本書は、ティソンディという韓国のどこにでもありそうな小村を対象に選ぶことによって、今日の農村生活のありのままの姿をしめすことができたと思う。実際、『朱子家礼』をはじめとする礼式の手引書どおりに儀礼を行い、儒教の教えをかたく守って生きることは難しい。大勢の家族のひしめきあう小さな家で、どのようにして人々は暮らしてきたのだろうか。ジャネリ夫妻の真摯で温かい視線は、村の日常生活の論理と、そこに渦巻く葛藤と、軋轢を回避しな



がら伝統と折り合いをつける工夫とを、見事にえぐりだすことに成功した。これが本書の第一の特色である。

ジャネリとイムの仕事の第二の特色は、こうした人々の暮らしと目に見えぬ死者との関わりを、「葬儀」「家内祭祀(忌祭・茶礼)」「氏族祭祀(時祭)」という一連の儒教的な儀礼と「祖上クツ」というシャーマニズムの儀礼との二つの側面から記述し、一方を男たちの世界、他方を女たちの世界として明確に提起したことである。こうした男女の儀礼行動と生活の論理の対立は、これまでもしばしば指摘されてきたことではあるが、ジャネリ夫妻はこの対立をティソンディという具体的な生活の場に戻し、この対立が村の生活のなかでの男女の社会的な経験の相違から生まれることを論証した。論証の過程

で引用されたフロイトやフォーテスやグッディの論理は、いささか煩瑣であるが、夫妻の選択した「認識論的な立場」はその難解さにもかかわらず支持に値する。なかでも、祖先のたたり言及し、丹念に聞き取りをかさね、そこから女たちの論理を導きだしていった手腕は見事である。

韓国社会の中で、女たちはきわめて周縁的な存在として位置づけられてきた。誕生にあたっては、まず男子の出生がのぞまれ、教育のうえでも差別をうけ、結婚にさいしては「出家外人」として実家との縁を失い、婚家の舅・姑と夫につかえ、主婦となるまでは家事の下働きに徹し、死してようやく夫の族譜に記録をとどめ、一族の成員となる。こうした女たちが、夫の祖先に対して夫とはちがった立場をとらなければ、むしろ不思議である。女たちの周縁性が、祖上クツをはじめとするシャーマニズムの儀礼や、プオク(台所)の竈王、内房の産神・龍神など家のいたるところに祀られた神々の祭祀を通じて補完され、多少なりとも償われてきたことは、最近の研究で明らかにされつつある。ティソンディの女たちの記録は、一方で伝統社会における彼女たちの不幸を描きだすと同時に、こうした逆境の中で生きてきた女たちの強さとその強さの根源の一端を明らかにしたものといっただろう。

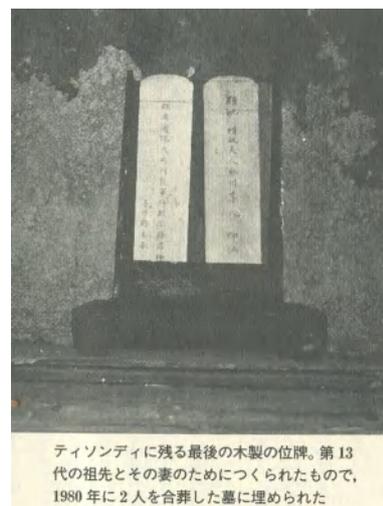
二人の仕事の三つ目の特色は、著者とその記述のスタイルにある。アメリカ人であるロジ



ティソンディから埋葬地まで喪輿を運ぶ



ティソンディとバンチュクコル親族集団の第19代祖先、権撥とその妻のための氏族祭祀



ティソンディに残る最後の木製の位牌。第13代の祖先とその妻のためにつくられたもので、1980年に2人を合葬した墓に埋められた



名節の祭祀(茶礼)で供物にスプーンをそえる。祭壇のうしろの屏風には紙の位牌(チパン)が張りつけられている

ヤー・ジャーニは、ティソンディの村人たちの好意と好奇の視線に囲まれて、「共感をいだきながらも異人（ストレンジャー）として外側から客観的に異文化を記述する」という人類学の基本姿勢をつらぬいていた。一方、任敦姫は女性でありながらソウル大学で人類学を学んだ、新しい世代の研究者である。彼女は、自らのよってたつ文化の根を掘り起こすという韓国民俗学の伝統を継承しつつ、自文化の多様性を記述



祖上クツで、男のムーダン（前列中央）が死んだ祖先の言葉を伝える

するという人類学の新しい方向を模索している。二人の協力できあがった本書が、英語で出版されたことは意義深い。韓国人であれば誰でも知っているような些細な日常生活の事実が、一度は異人の目をもって異化され、徹底的に整理され検討しつくされた上で記述される。任敦姫が、自文化を異国の言葉のフレームで切り取れば、ロジャーが、自らの言葉を異文化の槌で鍛える。そんな二人の作業が目に見えるような出来ばえである。

ロジャーとイムの仕事には「Lineage」という用語以外は、ほぼ専門用語は登場しない。また、韓国の農村の民俗語彙も最小限におさえられている。記述は、英語圏の読者がごく普通のレベルの知識で読めるように平易に一般化されている。このことは、しかし、彼等の仕事を日本に紹介する上で思わぬ困難を生んだ。たとえば、タイトルにも登場する「Ancestor Worship」という言葉には、「祖先祭祀」と

「祖先崇拜」という二つの側面があるが、「祖先祭祀」を選択した。韓国語には「祖上崇拜」という言葉があり、韓国の人々が祖先を敬う気持ちは篤いが、ロジャーとイムは「崇拜」という言葉のもつ道徳的な価値観をとりあえず括弧にくくりこみ、「祭祀」そのものを社会人類学的な視点から客観的に記述しつくすことを目指すように思えたからである。



また「Lineage」が父系出自集団を表すことはいままでもないが、これを「リネージ」とそのまま訳しても日本の一般読者には分かりづらい。「Twisongdwi Lineage」は「ティソンディ・リネージ」と置き換えても日本語にはならないので「ティソンディ権氏」とした。

「Lineage Rituals」という言葉にも「時祭」「時亨」という落ち着いた民俗学の用語がある。しかし、これはあえて「氏族祭祀」と訳した。



<ロジャーとドンヒ夫妻の1991年再訪>

韓国社会は、いま大きく変わりつつある。人口の四分の一以上がソウルに集中し、農村の過疎化の現象は日本以上に急速に進行している。一九七〇年代、朴正熙大統領時代にはじまったセマウル運動（新しい村運動）のおかげで、祖先祭祀をはじめとする祭りや民俗のありかたも大きくかわった。ティソンディもまた、その例にもれない。

一九九一年にジャネリ夫妻とともに訪れた村には、近隣の工場にかようホワイトカラーやブルーカラーのためにレンガづくりの大きなアパートが立ち、冷蔵庫の修繕をする小さな作業場ができていた。家の構造も伝統家屋の数が減って、二階建ての住宅も少なくない。ソウルや水原のベットタウン化が、また一層すすんだ観がある。

こうした大きな時代の流れのなかで、伝統的な暮らしのスタイルが崩れ、家族や共同体のあり方が変化し、人や物に対する見かたが変わる。生活が豊かになって、男も女も、子供たちも老人もずいぶん自由になった。今日のティソンディの人々は、おそらく誰一人、この自由と豊かな生活を否定しないにちがいない。しかし、同時にこの新しい時代に不安を抱く者も少なくないはずである。

韓国の伝統的な葬儀と祖先祭祀には、仏教やキリスト教といった宗教は介入しなかった。

人々の魂は、多くの場合、村という小さな共同体に住む親族や近隣の人々の間で葬られ、命日と季節の祭りに迎えられながら、時とともに少しずつ個性を失い、やがて時祭という氏族祭祀の機会に一年に一度だけ祀られることとなる。この祭りの仕方は、日本とずいぶん共通することも多いが、やはり既成の宗教が介入しないために、祀る人と人との紐帯が密であるように思う。この繋がりは緊密に組織され、族譜という大きな網の目に見事に組み込まれているから、そう簡単には綻びないように見える。この父系親族組織の網の目が、李朝時代から韓国社会を支えるひとつの礎をなしてきたのである。

今日の韓国社会を理解するうえで、こうした人間関係と社会の仕組みを知ることはきわめて重要である。ソウルの街を歩くと、「宗親会」「花樹会」という親睦組織の事務所の看板があちこち目に入るが、そのように目に見える現象のみではなく、政治や経済を支配する深層にまで、この論理は達しているように思われる。

だが、その一方で、急速な時代の変化はこの礎を根底から覆しかねぬ勢いで進行していることも事実である。ティソンディがこうむった急速な変貌と、それにとまなう人間関係の緩やかな変化とは、ソウルの団地やオフィスでも確実に進行している。今後、韓国の農村と都



1974年当時のティソンディ村、上の部落（ウン・マウル）



<1991年のティソンディ村>

市がどのような道を歩んで行くかは、まったく予断をゆるさない。

(以上は、Roger L.Janelli and Dawnhee Yim Janelli, *Ancestor Worship and Korean Society*, Stanford University Press,1982 を翻訳し『祖先祭祀と韓国社会』(第一書房)として刊行した際の後書きに加筆したものである。)